

【佳作】

変身のリアリティ

齋藤 睦美（東京都 学習院女子高等科 2年生）

ある日突然自分が人間の姿から別の生き物の姿に「変身」していたら―？誰もが身に覚えのあるこの空想は世界共通のものであるらしい。私がこのカフカの「変身」という本を知ったのは学校の授業で同じく人間が恐ろしい虎に変身してしまうという中島敦の「山月記」を習っていたときのことであった。「山月記」では虎に成り果て人の心を失いゆく李徴とそれを慮る袁修との惜別の心模様を読み解くことができたがこの物語は同じテーマではあるもののそれを全くもって異なった視点から表現した作品であるといえよう。

例えば主人公であるグレーゴルが変身してしまうのは皆から忌み嫌われる巨大な虫なのである。それに加え印象的であったのがグレーゴルの変身というあまりに衝撃的な変化を受け止めることのできな家族の反応であろう。最初はグレーゴルのお世話をしていた妹も息子が会いたいとその身を案じ家具を片づけようとした時に自分たちがグレーゴルを見捨てたと誤解されるのを避けようと優しさを垣間見せた母親も父親がりんごを投げつけ致命傷を負わせたあの時を境にグレーゴルの巨大な虫の姿の中にかこりと存在する人間の心を信じることができなくなっていく。ここ

で少し現実世界に思いをはせてみるとはっとするものがある。虫の姿をしていることや意思疎通がこちら側からできないことなど普通の人間とは違う側面を変身により抱えることとなったグレーゴルとその側面を受け入れられず排除しようとする周囲の人々。ここに現代社会にも根強く残る「差別」や「いじめ」の構図が見えてくるのではないだろうか。それをふまえてもう一度、自分ももしグレーゴルの家族の立場だったらと想像してみる。異形のグレーゴルを目の前にして自分はグレーゴルの持つ人間の心に気付き受け入れることができるのだろうか。すると少し自信を失っている自分があることに気付きショックを受ける。このことからなぜ差別やいじめがいまだに根絶されず繰り返されてしまうのかが分かったような気がする。それではどのようにすべきなのか。私は「関わり合うこと」が大切なのではないかと考える。様々な違いにとらわれることなくその人の根底にある気持ちや深意を関わり合うことを通して見極めその人のことを受け入れる。もしもグレーゴルの家族らがこれを実践していたならば救いのないこの物語の結末は全く違うものになっていたのではないだろうか。

次にこう考えてみる。カフカはこの物語の中でグレーゴルを巨大な虫へと変身させ一体何を表現したかったのだろうか。私はそれを誰もが持ちうる「孤独」や「疎外」の感情なのではないかと考える。まずグレーゴルはもとほは家族の唯一の稼ぎ頭であった。最初はグレーゴルが稼いできてくれるということに感謝をする家族であったがそれに慣れるにつれグレーゴルの収入が当たり前のように感じられてしまう。そんな現実が変身を経た物語の結末に影響を与えたのであろう。この物語は家族が虫になったグレーゴルを見捨てその抜け落ちた稼ぎ頭という役割を他の人が穴埋めをして幸せに暮らそうとする場面で終わりを告げる。まるでグレー

ゴルなど存在しなかったような、グレイゴルの存在の意味は何であったのか問いたくなるような、なんとも「疎外」的な最後である。「孤独」は言うまでもあるまい。グレイゴルが変身してから家族から拒絶された一人、死ぬまでの日々は孤独以外の何物でもなかったであろう。ここでグレイゴルが虫へと変身した理由について思いをさせてみる。変身する直前まで普段と変わらぬ平穏な生活を送っていたはずのグレイゴルがある日突然虫へと姿を変え、そこに特筆すべき理由がないとするならばここから読みとれるのはある種の「不条理」ではないか。すなわちこの「疎外」や「孤独」は誰の身にも突然降りかかるかもしれないということなのである。我が身を振り返り少しひやりとする。明日の朝起きても虫へと「変身」しているのかもしれないと私自身なのかもしれない。

ある日突然自分が人間の姿から別の生き物の姿に「変身」していたら―？最初はこのリアリティのないテーマに親近感を覚えることはなかったが読み進めていくほどにこの物語は現実世界の問題点や誰しもが抱く感情とリンクする、いわゆる寓話であることが分かった。グレイゴルの変身の影に秘められた問題解決への糸口や教訓を心に刻み今一度自分自身のことを顧みてみたい。

書名…変身
著者…カフカ